



この人を たずねて

名古屋大学大学院情報学研究科 准教授

石井敬子 氏

インタビュー
二村郁美



Profile—いいい けいこ

2003年、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。専門は社会心理学、文化心理学。著書は『名誉と暴力：アメリカ南部の文化と心理』（共編訳、北大路書房）、『文化と実践：心の本質的社会性を問う』（分担執筆、新曜社）、『つながれない社会』（共著、ナカニシヤ出版）など。

■石井先生へのインタビュー

—ご研究のテーマの全体像についてお聞かせください。

文化心理学の中でも、特に認知と感情の認識の文化差に興味があります。全体的な関心としては、どうしてもものの見方とか感じ方に文化差が生まれるのか、なぜ文化が存在しているのか、ということです。文化とか社会も人が作り上げているものなので、人と文化と社会のインタラクションがすごく重要になってきますから、そこにに関して少し違った切り込み方をしたいと思っています。一つは、文化と心のインタラクションについて、遺伝子多型に着目した研究をしています。もう一つは、全然違う方向から、でも「文化の維持」という観点から、ある文化の人たちが作り上げた文化的産物が、人から人に伝達される時に、どういう情報が残ってどういう情報が消えていくのか、どう意味が変わっていくのかに関する研究もしています。いずれにしても、大きく見ていくと、人のインタラクション

からできる文化というのがなぜ成り立っているのかを明らかにしたいというのが最近の研究動機です。

—これまで取り組まれてきたご研究は、具体的にどのような内容だったのでしょうか。

大学院生のころから取り組んできたのは、感情の発話の理解の話です。日本人は、敬語に気をつけたり、場の空気を読んだり、色々と気をつけなければいけないことがたくさんあるハイコンテキストの文化ですけど、アメリカとか英語圏の文化はローコンテキストなんですよ。そういうコミュニケーションスタイルの違いが、私たちが発話を理解する時にどう影響するのかということを、日米比較を通して検討してきました。

また、文化といった時に、日本とアメリカという二分法的に分けちゃうとわかりやすくいいんですけど、一体、文化の何が影響を与えているのかということを考える時には、日本の中での違いっていいヒントになると思うんですよ。私は京都大学を出て、初めて

就職したのが北海道大学だったんですけど、北大でデータをとって見たら、京大で実施した時と全然結果が違うんですね。北大のパターンがすごくアメリカ人的なんです。北海道って開拓の歴史があって、アメリカも移住の歴史を持っているところですし、それが個人主義と関連している可能性がありますよね。日本とかアメリカとかの文化比較だけじゃなくて、文化内比較とか、文化の何が文化差を生んでいるのだろうということも研究してきました。

—文化というテーマに関心をもたれたそもそものきっかけとは。

文化に興味を持つようになったのも本当にたまたまなんです。そもそも私、大学に入った時も心理学をやるつもりは全然なくて、学部も実は農学部だったんです。それで、たまたま大学でとったのが、結果的には指導教官になる北山忍先生の授業だったんですけど、驚きの連続でした。当たり前だと思っていたことがどうも全然当たり前ではないってということが衝撃的で。たとえば逸話レベルですけど、エスキモー（イヌイット）とか、雪に関していくつも言語があるって話があるじゃないですか。ああいうのも、知った時にはほんまかいなって思って、そんなに違ったらたまたまのものじゃないな、文化っていうのはそんなに影響あるのかって感じました。あとは、実際に色々研究をやってみて、いかに自分が日本文化にがんじがらめになっているかをいろんな時に感じて、自分を含めて、人の行動原理とか心の働きを探るうえで、どうも無視できないのが文化にはあるんじゃないのかなって感じました。そういうところから、文化に注目した、人とは何かっていう研究ができたらなあと思ったのが出発点です。



——自分自身も文化の中で生きて
いると、自分を相対化して、自分
の当たり前を疑うことって難しい
のではないと思うのですが、先
生はどのように研究テーマを見つ
けていらっしゃるのでしょうか。

難しいですね、私自身が知り
たいところです。一つは、心理学
だとしたいアメリカ人を対象と
した論文ばかりなので、そういう
ものを読んで、これは直感的に合
わないなというところから始める
場合もあります。あとは、共同研
究者と議論しているところから出
てくることも多いですね。共同
研究者が海外にもいるので、違っ
たバックグラウンドの人との対
話ってというのが、そういうのを気
づかせてくれるうえでは重要に
なってくるのかなと思います。

——文化を研究するときの難しさ
や工夫があれば教えてください。

やっぱり言語のハンデもある
し、こっちが思っていることは
向こうにはなかなか伝わらない
ので、結局わかりやすい実験をす
るっていうのに尽きるんですよ
ね。あんまり凝った実験をやると
こけるというのか、相手に理解し
てもらえないというのかな。本当
に単純な実験デザインを使って、
課題も非常に簡単にして、そうい
うところで勝負していくというの
か、それでうまく文化差を見つけ
られるといいなというところは
常々考えています。

——これからどのようなご研究に
取り組もうと考えていらっしゃい
ますか。

遺伝子多型と文化の関係につい
ては、いくつかのことが明らか
になってきていますが、あまりに散
発的で、ある遺伝子多型を扱って
いる研究では他の遺伝子多型につ
いて見ていないんですね。なの
で、遺伝子多型についてできるだけ
網羅的に調べる研究を今やって

いて、これから4～5年はかかり
そうです。過去の結果が追認でき
るのかとか、これまでにわかって
いない遺伝子多型と文化差の関連
があるのかとかについて、系統立
てて、サンプルサイズも大きくし
たうえで検討しています。

——最後に若手研究者に向けた
メッセージをお願いします。

うまくいかないことがほとんど
じゃないですか。だから一つだめ
でも落ち込まないで、いくつかオ
プションを持っておくようにし
て、どれかは当たるように心掛け
ていくのがいいんじゃないのか
なと思いますね。あと、英語で
書くことは重要だと思います。英
語で論文を書くと、自分の研究を
いろんな人に知ってもらえる可
能性が高まって、新しい人と一緒
に仕事ができ、また成果につな
がっていくので、リジェクトされ
てもめげずに色々出していったら
だんだん積み上げていくのが重要
じゃないかなと思いますね。

■インタビューの自己紹介

インタビューを終えて

今回、石井先生にお話を伺い、
文化心理学の多様な視点の切り口
を教えていただき、そのおもしろ
さと奥深さにとても心惹かれました。
これまでに取り組まれてきた
幅広いご研究内容や最新の研究知
見など、伺ったお話はどれも興味
深いものばかりでした。また、石
井先生は、私の研究テーマについ
ても聞いてくださり、質問にお答

えいただく際にも、私の関心と関
連する内容を取り上げながらお
話してくださいました。誌面の都
合上、記載することができなかつ
たのですが、石井先生が実施され
た、子どもを対象としたご研究に
ついてのお話は、特に興味深く、
題材や指標の設定の仕方など、と
ても勉強になりました。石井先生
のお話を伺って、私も自分自身の
テーマについて、比較文化的な視
点を取り入れた研究を行いたい、
という気持ちがより一層強くなり
ました。

現在の研究テーマ

私は、向社会的行動に関する認
知の発達の変化について研究して
います。向社会的行動は基本的に
ポジティブに評価されるものと考え
られていますが、実際には、背景
にある文脈に応じて、大きく異
なる形で認知されます。また、そ
の認知の仕方は発達のにも大きく
変化します。様々な文脈の中で生
じる向社会的行動を、人びとがど
のように認知し、その認知のあり
方が発達とともにどのように変化
するのかについて明らかにしたい
と考えています。

拙筆ではありますが、今回イン
タビューをさせていただいて強く
感じた、石井先生の温かいお人柄
と、文化心理学の魅力について、
少しでもお伝えできていれば幸い
です。このような貴重な機会をい
ただき、本当にありがとうございます。



Profile—ふたむら いくみ

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期
課程（2019年3月末まで）。博士（心理学）。同年
4月より、東京大学大学院教育学研究科教育学研
究員。専門は発達心理学。論文は、Age-related
differences in judgments of reciprocal and
unilateral prosocial behaviors（共著、*Journal of
Experimental Child Psychology*）など。